

聖歌隊軽井沢合宿を終えて

ニコラス 内田 研吾

今年も例年のごとく、八月の第四日曜日にかけての四泊五日の聖歌隊の合宿が軽井沢で行われました。今年は聖ルカ病院の創立百周年事業の一環として聖ルカハウスが新たに建て直され、木立の中にスエーデン調の赤い素敵な別荘となって生まれ変わりました。内部は新築とあってどこもきれいな白木作りのバリアフリーで使い易くできておりました。我々が滞在した時は例年に無く涼しい日が続き、金曜日の夜は気温が十二度にまで下がり、風邪をひいたり、ひきそうになった隊員が続出しましたが、さすがスエーデンの住宅は気密性が高く、内部は暖かく保たれており大変快適でした。隊員の数が増えたこともあり、聖ルカハウスだけでは全員を収容することができないために、キリスト教関係者のみが見える「恵みシャレー」へ昨年同様に、一部の方は分宿となりました。

さて合宿のスケジュールは、七時の早禱に始まり、午前午後共、普段は長時間できない練習を全員で、あるいはそれぞれのパートに分れて、大竹隊長の熱心な指導のもと日曜日のコンサートに向けてみっちり練習を重ねました。五時から晩禱そして、夕食後は場所をコンサートの行われるシヨウ記念礼拝堂に移してゲネプロ形式で行いました。この礼拝堂は軽井沢を開いた恩人と言われる英国人のアレクサンダー・シヨウ司祭を記念して建てられた木造の小ぢんまりとした暖かみのある教会で、現在は中部教区の村岡司祭ご夫妻が管理をされています。そして終禱で一日が終わるのですが、就寝前のひと時、これからの聖歌隊について、または歌唱力を如何にして高めることができるか等の話題に留まらず多岐にわたる様々なことについての熱い議論が、ビアグラス片手にたたかわれました。普段は隊員同士じっくりと話す機会がない為、このひと時がとても貴重な意見交換の場となっています。

く下がっていないことが練習の成果であるといえるでしょう。

今回も井原司祭が参加してくださり、早晩禱の司式及び恒例の講話には、コンサートで歌う詩篇第三百三十七編の「バビロンの川のほとり」の歴史的背景と聖書におけるユダヤ民族の捕囚についての考察をお願いしました。お話を聞きながら紀元前の昔に思いを馳せて、当時のユダヤ民族が受けた苦しみが伝わり、作品のバックグラウンドを理解することにより、おのずと歌っている時に感情移入でき、作曲家の思いを表現して歌うことができたように思います。

我々が日頃アンセムとして歌っている曲には様々なものがありますが、常にそこに描かれている思いやメッセージに沿った演奏をする事が、聖歌隊に要求されるものといえます。この合宿での実りを、九月からの主を賛美する礼拝に於いて活かし、ますます練習に励むよう努めたいと思います。

主日礼拝後のコンサートでは、ブルックナーの作品を二曲、フランクの有名な「天使の糧」、二人の作曲家ボイスとパレストリーナの同じ題名の作品で「バビロンの川のほとり」そして会衆といっしょに聖歌を二曲歌った後最後は、韓国のイ・ゴンギョン氏が東京教区の為に作られた「主の祈り」を奉唱して終わりました。全体の出来は、隊長からの講評では高い評価を貰い、後で聴いた録音で音程が全